

戦争中の私の体験

長崎県諫早市 島田 ヤエ子

昭和10年生まれの私達は、国民学校へ入学しました。当時の国語の本は、「アカイ、アカイ、アサヒ、アサヒ」で始まりました。

音楽は軍艦のうた、図画は飛行機や軍艦の絵で花などはあまり記憶にありません。

年々勉強する時間は少なくなり、上級生は防空壕掘りや、校庭のあちらこちらに『あれは何と言うのだろう』、今だに名前は知らないがすり鉢状の穴を作り、斜面になった所をぐるぐる回って飛行機に乗った時のバランスの取り方と目まいの予防法になるとのことで、随分練習しました。僅かでもあいた運動場には、耕してさつま芋やかぼちゃが植えられました。桑の木の皮を剥いで乾燥して供出し（これは布の原料）、ドングリや檜の実アルコールの原料、ヒマを植えて（ヒマシ油の原料）、また生えている松の木に切り込みを入れ、そこから流れる樹液を集めて（飛行機の燃料）と聞いて一生懸命集めました。

戦争がはげしくなるにつれて疎開して来た学童達も多くなり、1学級は60名近くになり、机と椅子が教室に入れにくいくらいでした。

昭和20年になると、朝学校へ行っても着いた頃には空襲警報が鳴り、またすぐ団体下校しました。家から学校まで山路を歩いて約1時間くらいかかるので、学校に行くのは取り止めになりました。その代りに山を開拓して、さつま芋や、里芋や、かぼちゃを上級生の指導のもとに植えました。

私は昭和20年6月頃より足の傷が化膿し、日毎に悪化して行きました。毎日背負ってもらって竹山の中の防空壕へ行きます。

昭和20年8月9日、いつものように一人防空壕の近くの竹林にいました。「ピカッ」と稲光のような光が走り、今までに見たことのない光が……、『何だろう』と思っていると暫くして「ゴーッ」と言うものすごい音がだんだん近づいて来て、炸裂音と台風のような強い風が吹いて来ました。

孟宗竹が弓のように曲がり先端が土について、右に左に大きく揺れました。孟宗竹がこんなに曲がったのは初めて見たので、これは大変なことだと子供心に思って恐ろしくなり、両親の所へ駆け出したい衝動にかられたけれども、一步も動けない私でした。

その時頭をかすめたのは、『一人でここで死ぬのだろうか』という不安でした。思わず御念仏が口をついて出ました。それというのも、まだ母と一緒に寝る小さい頃から「御念仏を誦えれば必ず仏様が助けて下さるよ」と言い聞かされていたからです。

たちまち空は暗くなり、まぶしいはずの太陽は夕方のような真っ赤な太陽となり、まわりは夕方のように暗くなり、空からは黒いものが降って来て、時間が過ぎる程灰はどんどん降って来ました。にわかにか曇った空からパラパラと雨も落ちて来ます。里芋の葉っぱには黒い雨の跡

が点々と残り、中央に溜った水は水銀のつぶのようではなく、その時の雨はドロツとして黒いベタベタした油のような水が葉っぱの中央に集まっていました。

父は自転車の荷台に私を乗せて諫早の病院を片っ端から訪ねましたが、どこの病院も薬が無い、包帯がない、看護婦がいない、「看護婦を疎開させるように通達が来た」とのことでどこも受付けてもらえず、そのまま帰宅した。足はその間もどんどん化膿し、食欲も無く、痛みのため夜も眠れず、日々に痩せ細って行くばかりでした。次の日も父は私のために病院をさがしに行きました。一人防空壕に残された私に山蚊は全部集まって来て刺します。

そんな時、姉が炊きたての白御飯のおにぎりを持って来てくれました。米は一粒も無いものと思っていたので、「どうして」と聞くと、ラッカサン爆弾が長崎に落ちて長崎は全滅したそうだから、「どうせ死ぬのだったら」と言って、近所中の人達がなけなしの米を持ち寄って、大釜で炊き、飛行機が来る度に火を消したりまた燃やして、やっと炊き上がった御飯をおにぎりにし、皆平等に分け合ったのがこれだと言うのです。最後のおにぎりかと思うと涙がこぼれました。白い御飯は長いこと食べてなかったのも、そのおにぎりのおいしかったこと、あの時の味は今でも忘れられません。

それから父はやっと私の足を手術して下さる先生を見つけたと話してくれました。

次の日、また自転車で父と病院に包帯を持って行きました。手術台上がった私に父が言いました。「麻酔薬が無いから痛いかも知れないけど足を直すためには我慢しなよ」と……。

手術が始まりましたが、あまりの痛さに泣き暴れるのを3人の大人が支えきれずに両手両足を手術台に縛られました。「足がなくなってもいいから止めて!!」と力の限り泣いて、それからどのくらいの時間が過ぎたのでしょうか。もがく気力も、泣く気力もなくなって、ようやく足の手術は終わりました。それまで痛みで眠れなかった分をこんこんと眠り続けました。

目が覚めたその日が昭和20年8月15日の敗戦の日でした。その後も毎日通院しました。ちょうど病院には長崎の原爆で数多くの黒こげの生きた人々が戸板に乗せられて運ばれて来ます。生きながら目も、鼻も、口も判別出来ないように黒く焼けただけの人々が、生きたまま日に日に腐ってゆき、それにうじ虫がわくのです。ほとんどの人が次々と死んでいきました。通院していた人達には自分の包帯を分けてやったり、受付の順番を代わってやったり、包帯がないので古いかやを洗濯して包帯代りにあげました。終戦になった時は小学4年生でした。

悲惨な戦争は二度と起こしてはならない事です。戦後50年と言いますが、戦死した兄の事等今だに昨日の事のような気がします。人と人が殺し合うのは愚かな事です。食糧も無く、衣料も無く、住む家も無く、家族もなくしてしまうのが戦争です。

足の傷を見る度にあの日の事を思い出します。